

研究主題 「児童に生命尊重の態度を育てる指導の工夫 - 生活科の展開例 - 」

東京都教職員研修センター研修部現職研修課
世田谷区立烏山北小学校 教諭 今橋 直子

研究のねらい

生活科の内容（ 7 ）において児童に生命尊重の態度を育てる指導の在り方を明らかにする。

今日、生命尊重の態度を育てることは重要な課題である。児童・生徒による重大事件が相次ぎ、文部科学省は「児童生徒の問題行動対策重点プログラム」の中で、命を大切にす教育の充実を第一に挙げている。

東京都の「心の東京革命行動プラン」には、「動物や植物の世話をさせ、命の尊さを学ばせよう」と書かれているが、一方で、児童・生徒が生き物とかかわる機会は減少している。

そこで、本研究では、生き物の飼育・栽培を取り上げた生活科の内容（ 7 ）において児童に生命尊重の態度を育てる指導の在り方を明らかにすることを研究のねらいとした。

研究の内容と方法

1 基礎研究	2 実践研究
(1) 学習指導要領の分析 (2) 先行研究の分析 (3) 生命尊重の態度を育てる上での課題	(1) 指導方法の開発 (2) 検証授業の実施

研究の結果と考察

1 基礎研究から

(1) 学習指導要領の分析

生命尊重の態度育成について、学習指導要領では道徳、理科に示されている。しかし、生き物とかかわる体験の減少などを踏まえ、他の教科における学習活動など、様々な機会をとらえて生命尊重の態度育成を図る必要がある。

(2) 先行研究の分析

生活科では、生き物とのかかわりを扱った実践はあるが、生命尊重の態度育成に視点を置いた実践は多くないことが分かった。

(3) 生命尊重の態度を育てる上での課題

生き物を見る視点

児童が授業において生き物を見る視点には、大きく分けて次の2つがある。指導に当たっては、この2つの視点を分けて考える必要がある。

ア 飼育動物としてみる視点	イ 食糧としてみる視点
生き物が寿命を全うするまで健全に生きられるよう、生き物の立場に立って考える。	人間の役に立つ存在として、利用する立場から考える。

ア 飼育動物としてみる視点

生命尊重の態度を育成するためには、まず、生き物を飼育動物としてみる視点をもたせることが必要であると考え。生き物の立場に立って考えようとするのが生命尊重の態度育成につながるからである。動物だけでなく植物についても基本的には同様である。

イ 食糧としてみる視点

畜産物など、食糧として扱う場合には、次に挙げるような視点が特に重要である。

「食育の推進に当たっては、国民の食生活が、自然の恩恵の上に成り立っており、また、食に関わる人々の様々な活動に支えられていることについて、感謝の念や理解が深まるよう配慮されなければならない。」(食育基本法第3条 下線は今橋による)

課題として考えられること

生活科において生命尊重の態度を育てる場合には、児童の発達段階などを踏まえた場合、生き物を飼育動物としてみる視点に立つことが必要である。しかし、日常生活の中には生き物を食糧としてみる視点が存在する。そのため、児童がこのことに疑問をもつことも考えられる。このような場合、東京都教育委員会が作成している『人権教育プログラム(学校教育編)』を十分参考にしながら、食肉などの仕事に対する正しい理解が図られるよう配慮する必要がある。その上で、児童の疑問を生命について考える機会としてとらえ、共に考えようとする姿勢をもつことが大切である。これは人間の生き方にかかわる重要な問題であり、簡単に答えを出すのではなく、時間をかけて児童が考えを深めていくようにすることが生命尊重の態度につながると考える。児童・生徒の実態や発達段階に応じた指導の方法を開発することは今後の課題である。

2 実践研究から

(1) 指導方法の開発

生活科の授業を通して生命尊重の態度を育てるには、生き物を大切にできる体験をするとともに、生き物を大切にできる自分自身のよさに気付くことが有効であると考えた。そこで、生活科の内容(7)において、次のような視点から指導方法を検討した。

児童が生き物のためになるかかわり方をするようにする。

児童が生き物の様子を適切に理解するようにする。

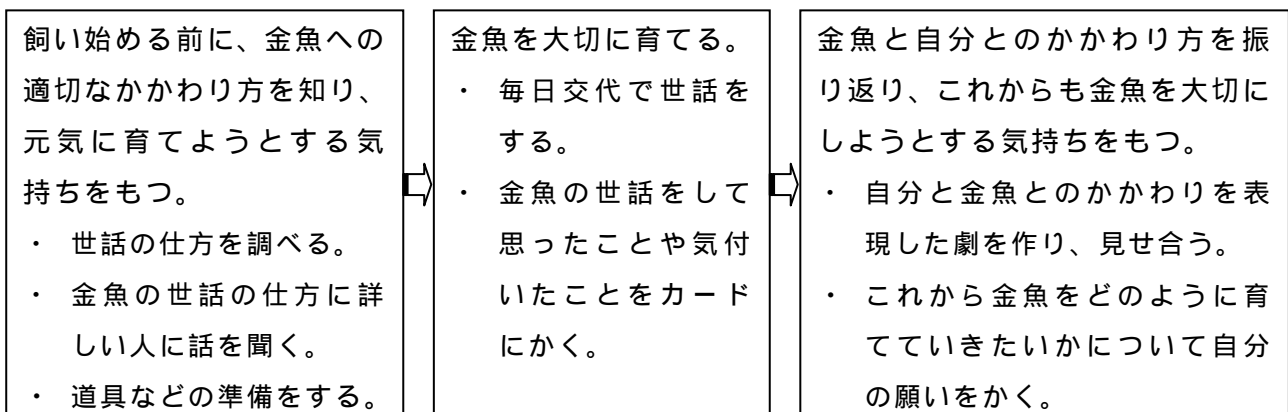
活動を認め、価値付ける。

(2) 検証授業

第2学年生活科 単元名「長生きしてね、金魚さん」

実施時期 10月から12月

授業の概要(全15時間)



(3) 育てたい生命尊重の態度とその手だて

本単元では、生命尊重の態度を育てるために次の表のような手だてを考えた。ゴシック体で書いた部分は特にポイントとなる手だてである。

本単元において生命尊重の態度を育てる指導の視点	本単元における具体的な手だて	本単元で育てたい生命尊重の態度	身に付けさせたい態度
生き物のためになるかかわり方をするようにする。	世話の仕方を調べたり、金魚に詳しい人の話を聞いたりする時間を設定し、生き物のためになる適切なかかわり方を知らせる。 ----- 児童が日常的に金魚にかかわることのできる環境を整える。	生き物に合った適切な世話の仕方をすることができる。	他者を正しく理解し、尊重する。
生き物の様子を適切に理解するようにする。	健康状態をみる方法を知らせる。 ----- 絵カードを利用したり、劇に表現したりして、生き物が感じていると思われる気持ちに注目させる。	金魚に健康で快適に過ごして欲しいという願いをもつてかかわろうとしている。	他者の気持ちを推し量り、考えようとする。
活動を認め、価値付ける。	児童の活動に対して金魚が感じていると思われる喜びや感謝の内容を知らせる。	これからも金魚を大切にしようとしている。	生命尊重の考えに基づいて自分の行動をコントロールする。

(4) 指導の手だてと児童の様子

指導の手立て	児童の様子（「 」はワークシートの記述）
金魚を飼う前に、金魚の飼育の仕方に詳しい人の話を聞く機会を設け、世話の仕方について十分学習することができるようにした。	最初にポリ袋に入っていた金魚を水槽に移すときの留意点や、毎日のえさのやり方などについて学習したことを生かして、金魚のためになる適切なかかわり方をしようとしていた。 「えさをあげるときにひとつまみの量を考えてあげた。」 「病気にならないように十分注意して、病気になったらすぐに薬をやる。」
にこにこした表情の金魚と悲しそうな表情の金魚の絵カードを提示して、飼育に当たってのめあてをもたせた。毎日の世話の際に用いる記録カードにも、この絵を入れて金魚の様子を見る視点をもたせた。	金魚が元気でいられるようにしたい、金魚が喜ぶようにしたい、というめあてをもって世話を続けていた。また、金魚の気持ちに注目し、詳しく考えようとしていた。 「いっしょに遊んでこうちゃんとはく君（金魚の名前）がうれしくなることをしてあげたいと思います。」 「金魚を幸せにしてあげたい。」 「えさをもっとちょうだい、と金魚は言っているかも知れませんが、でも、病気にはさせず、ずっといっしょにいたいから、えさのあげすぎには注意します。」
児童の活動に対して、「金魚が	児童は主として教室における日々の飼育動物（金魚）とのか

<p>きっと喜んでいるでしょうね。」といった言葉をかけ、児童の活動を評価することにより、これからも金魚を大切にしようとする気持ちをもつように促した。</p>	<p>かわりを通して生き物を大切にしようとする意欲や態度を身に付けたが、指導者が活動を認め、価値付けたことで、さらに学習内容の共有化を図ることができたと考える。</p> <p>「いつも元気でいてほしいから、いつも忘れずにお世話をしたいです。」</p> <p>「ちゃんとえさを忘れずやって、もっともっと優しくかわいがって、あいさつもして、遊んであげて育てたいです。」</p>
--	--

(5) 検証授業の考察

検証授業の結果から、特に有効であったと考えられる手だては次の3点である。

金魚へのかかわり方についてのめあてをもたせたこと。

金魚を飼い始める前に、金魚の飼育に詳しい人の話を聞く機会を設定し、適切なかかわり方を知らせたこと。

絵カードを示し、金魚の気持ちに注目させたこと。

3 授業改善に向けて

(1) 生活科の内容(7)における生命尊重の態度育成のポイント

これまでの研究から、生活科の内容(7)において生命尊重の態度を育てる指導のポイントは生き物へのかかわり方のめあてをもたせること、生き物への適切なかかわり方について知らせること、生き物が感じていると思われる気持ちに思いを寄せ注目させることであると考えられる。下の表は、この3つのポイントを生かした展開例である。

生活科の内容(7)において生命尊重の態度を育てる単元の展開例

主な学習活動	留意点
<p>生き物が健康で快適に過ごせるような世話をしようというめあてをもつ。</p>	<p>生き物の気持ちに注目させ、生き物の立場に立って世話をしようとする気持ちをもたせるようにする。十分な世話のできる生き物を取り上げる。</p>
<p>育て始める前に、生き物の世話の仕方や適切なかかわり方について詳しい人に話を聞く。</p>	<p>どうすれば生き物が喜ぶような育て方ができるのか、生き物の立場に立って話をしてもらう。</p>
<p>生き物の立場に立って、生き物の気持ちを考えながら育てる。</p>	<p>日常の世話のときにかく記録カードに生き物の気持ちについて考えてかく欄を設ける。</p>
<p>自分と生き物とのかかわりを振り返り、生き物の気持ちについて考え、表現活動を行う。</p>	<p>児童が生き物になったつもりで表現することができるようにする。</p>

今後の課題

生き物に思いやりをもって接する態度を身に付けた児童は、人とのかかわりにおいても自他を尊重する態度をもって臨むことが期待される。今後、他の教科などの指導との関連について考え、いろいろな機会をとらえ、生命尊重の態度を育てる指導の在り方を考えていくことが大切である。

また、生活科では、内容(7)において動植物の飼育栽培を行う際、生命尊重の態度を育てるためには、どのような生き物を取り上げることが適切であるか、さらに検討していきたい。